

## 第四章

### ラーマクリシュナと身近の人びと

——妻サーラダマニとの宗教的結合——

カーリー寺院の持ち主であるマトール・ビスワスが、本来ならば自分の寺の雇い僧にすぎないラーマクリシュナに対して、献身的とも言えるほどの奉仕をしていることは、これまでも時おり述べてきた通りである。

ラーマクリシュナは、訪ねてくる修行者や出家たちに食事を出したり、衣類などをあげるのが大好きだった。これは多分に母親の性格の遺伝らしい。そこでマトールは境内のなかに倉庫を作って、いつも食物や衣類などを豊富にそろえておき、ラーマクリシュナがいつでも気のむくままに使用できるようにしておいた。それでもマトールはまだ気がすまない。もし自分が死んだら、彼が困るのではないかと案じ、何か基金のようなものをつくるとか、または財産の一部を彼の名義にしておいて、その利息ですべてまかなうようにするとか、安心のいくようにしておきたいと思うのだが、こんなことを申し出ると、きっと彼は怒るにちがいないと察し、なかなか言い出せないでいた。それでも遂に我慢ができなくなり、直接にはなく、フリダイにそのことを話した。それをきいたラーマクリシュナは、案の上、気狂いのようになって怒り、やせた腕でマトールの堂々たる厚い胸になぐりかかった。

「見下げはてたヤツめ！ 見そこなったよ！ このわたしを、世間並みの人間にしてしま

「何か！」

そう言われても、マトールはどうしてもその考えを捨てる気になれない。そんな時期に、いい機会が到来した。

ラーマクリシュナの母、チャンドラマニは、郷里の村で可愛い末息子のうわさを人づてに聞いて、朝夕心配に明けくれていたが、とうとう辛抱ができなくなって息子のところにやって来たのである。一八六四年のことであった。それから十二年間、境内のなかの小さな建物に住みつき、一八七六年八十五歳で亡くなるまで、末息子の傍で暮らすことになるのである。

マトールはこの母親に目をつけた。この老母を説き落として、財産の一部をチョットパツダエ家の名義にすることを承知させようと思いついたのである。何度も足を運んで、「何かご不自由なことはありませんか？ 何でもおっしゃって下さい」と、しつこく言って、自分の計画を実行するについて理由となるような言葉尻をつかまえようとするのだが、老母はその都度、「何一つ不自由なことはありません。マトール旦那様には私も家族が皆してお世話になりました、ほんとに有難いことでございます」と、ひたすら礼を言うだけだった。ある日、どうしても何か一つでも希望を言ってくれと、ことの外強く言うと、老母はこう言った。遠慮がちに――。

「どうしても何か下さらないとお気がすまないのですしたら、タバコの葉を一アナほど買って

下さい。菌の治療にタバコの灰がほしいので……」

マトールは思わず涙をこぼした。そして自分の世俗的な計画を恥じて、捨てた。「この親にしてこの子あり」——マトールは後に人に話したという。

六カ月にわたる無分別三昧の後、ラーマクリシュナの体がなかなか元通りに回復しないので、マトールは彼に郷里の村へ帰ってしばらく保養してくることを勧めた。八年前も、過度の修行で心身がひどい状態になったとき郷里へ帰って、すっかり元気になって戻って来たことを、この保護者はよく憶えていたのである。

一八六七年の五月、ラーマクリシュナはフリダイと女行者ヨーゲースワリを伴って、二度目の帰郷をした。

カマールブクル村にはいろいろな噂がひろまっている——。

ゴダドルは女の格好をして、ハリ、ハリと叫びつづけているそうだ。名前を変えて、イスラム教徒になったそうだ。朝から晩まで、アッラー、アッラーと言っているそうだ、等々である。

村の人たちは、ラーマクリシュナが見分けもつかぬほど人間が変わってしまったにちがいないと思っていた。ところがニコニコしながら村に入ってきた彼は、やせ細っているけれど、全く昔のままである。人なつこくて、愛嬌があつて、誰だつて一度会えば大好きになつてしま



カマールブクル村

村の人気者、ガダイ少年のころとちつとも変わらな  
い。年齢をとるのを忘れたかのようだ。ところが、  
貧弱な体の奥の方から、何とも説明のできぬ光が輝  
き出ているようで、はじめのうちはなかなか近よ  
れなかった。やがて、勇気を出して彼の家に行き、  
傍に坐っていると、その人の心は、暁の空のように  
すがすがしい気分になり、言うに言われぬ安心感と  
心の休まりを感じる。彼の家から出ると、だんだん  
心がふさいできて、どうしてもまた行きたくなる。  
これは村人ばかりでなく、後年、彼の弟子や信者たち  
も皆、口をそろえて言っていたところである。

ラハ家の人々をはじめ、村に住むさまざまなカー  
ストの人たちが毎日ラーマクリシュナのところに  
やって来て、大勢で彼をとりまいていた。仕事を  
しなければならぬ人は、朝早くか夜にやってくる。  
婦人たちは美味しい料理や菓子、果物などをたくさ



サーラダ・マニが居住した部屋（右）

ん持つてきて、ひと口でもラーマクリシュナに食べてもらうことを喜ぶ。残りは皆で分けて食べる。彼が宗教の話をする時、皆はへび使いに呪文をかけられたへびのようになつて、身じろぎもせずジーツときき入るのであつた。

両親のもとで暮らしていた幼な妻サーラダマニは、このとき十三歳になつてゐた。夫が村に帰つてゐるといふので、親類の婦人に連れられて会いに来た。結婚式のとき以来、会うのは二度目である。ラーマクリシュナはこのときから十八歳年下の妻を教育しはじめた。純真無垢な心の持ち主で、しかも賢いこの女性は、自分の夫がどのような人であるかを直感的に知り、心から従順にしかも懸命にその指導を受けてゐた。ラーマクリシュナは家庭生活のこまごましたことや人情の機微などに実によく通じていた。彼は妻に、主婦としての家事一般の仕事から、人の性質の見分け方、金銭の使い方、時と場所による適切な言動などを徹底的に教えこんだのである。

申し分のない毎日のようだったが、一つだけ困ることがあつた。それは女行者ヨーゲースワリがサーラダマニの存在を喜ばないことであつた。ラーマクリシュナの傍に妻と名のつく女性があ

いること自体が気に入らないのである。

彼が親切に妻を指導していると、横から口を出してうるさく文句を言う。彼がトータプリの教えを受けたことも甚だ面白くなかったのである。一種の独占欲であろう。ラーマクリシュナはこの恩人に対して心からやさしく仕えたが、自分の行動については一歩もゆずらない。女行者は日増しに荒れるようになり、サーラダマニばかりでなく、来ている村の婦人たちにまで当たりちらす。村人の誰かがうっかり彼女の前で、「これについてラーマクリシュナさまのご意見をうかがいたいと思ひまして……」などと言おうものなら、柳眉りゅうびを逆だててまくしたてる――。

「あの人に何がわかります？ 彼の目を開いてやったのはこの私なんですよ？ 私以上のことを言えるはずがないでしょう?!」

しかし、こんな様子を見ているもラーマクリシュナは平然として今まで通りうやうや恭しい態度で彼女に接していた。妻のサーラダマニも夫の命令通り女行者を姑と思つてかゆい所に手がとどくようにひたすら忠実に仕えていた。ところがあるとき、ヨーゲースワリは村で尊敬されている人物に対して、村のしきたりを無視した非常に失礼な態度をとつた。これが原因で村人たちが騒ぎ出し、それを知つたフリダイが激怒して、「村のしきたりを守らないなら、ここにいってもらわけにはいかない」とまで言い、他の親類の人びともフリダイの主張を支持したので、彼女はやむなく自分の非を認めたと、大いに自尊心を傷つけられ、何日かじつと考えこんでいた。

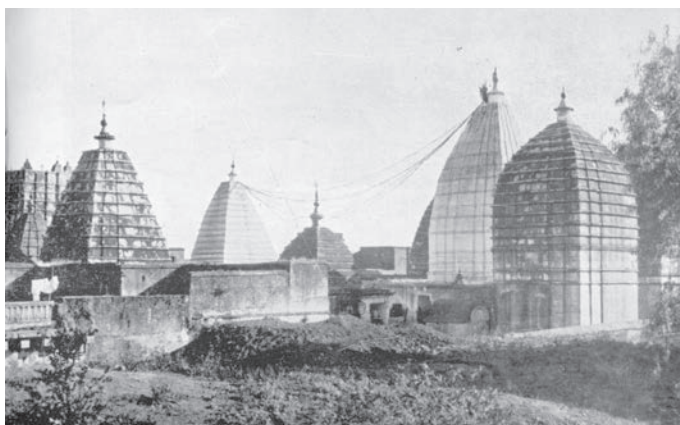
もともと修行をつんだ優秀な女性なのである。さすがに悟ったと見え、ある日、自分でさまざまな美しい花をつんできて花環をつくり、それでラーマクリシュナをきれいに飾って、自分の彼に対する気持ちの間違っていたことをあやまり、もとの弟子を神像に対するように礼拝した後、村を去ってベナレスへと旅立って行った。

ラーマクリシュナは約六カ月郷里に滞在して、健康をすっかり回復し、一八六七年の終わりに、カーリー寺院へ戻った。

二度目の帰郷からドッキネーシヨルに戻って、その後数年の間にラーマクリシュナはマトールとともにいくつかの巡礼旅行をする。

一八六八年の一月二十七日、一行はベナレスへ向けて出立した。ラーマクリシュナはフリダ伊を伴って同行した。マトールとその妻と娘のほかに、料理人をはじめとする男女の召使いが百人を越え、大名旅行のように豪勢な一行である。

途中、デオガルという所に着いたとき、一大事が持ち上がった。その村は飢饉におそわれていて、村人たちは飢えのため骸骨のようになり、動く力もなくあちこちにうずくまっていたのである。ラーマクリシュナは生まれて初めて見たこの悲惨な人間の姿に胸もつぶれ、さっそくマトールに向かってこの人たを助けてあげるよう頼んだ。



デオガルの寺院

「大勢の人数でこれから何ヵ月も旅行をするのに、今ここでこの村中の人たちに施しをしたら旅費が足りなくなってしまう。カルカッタにいるときは事情がちがうのだから、あんまり無理なことを言わないで下さい」

むろん、ラーマクリシュナはこんな言いわけを聞く耳は持たない。涙をこぼしながら彼は言った――。

「人でなし！ わたしはもうベナレスなどには行かないよ！」

そして道ばたで死にかかっている人の傍に坐りこんでしまった。こうなるとダダツ子と同じでどうしようもないことをマトールはよく知っている。やむを得ず数日にわたって全村に食事を施し、一人ずつに衣服と金を与えた。ラーマクリシュナはすっかり機嫌を直し、伏し拝む村人たちに別れ



ベナレス

を告げて旅を続けた。

一八七〇年にもマートルはその所有地に小作料徴収に行ったとき、うっかりラーマクリシュナを連れて行ったために、徴収どころか納期を延期し、小作人たち一人一人に金と食物を施すことになってしまったことがある。こうしたことが後年、ラーマクリシュナ・ミッシヨンのインドにおける無数の社会奉仕事業の源となっているのである。

ベナレスに着くと、彼はフリダイを伴に連れて毎日のように諸寺院に詣でて神々を実感し、またそこに住んだり全インドから集まって来ている宗教家や修行者に接して見聞をひろめた。故郷の村で別れた女行者ヨーゲースワリにも会い、彼女が一人の忠実な女弟子を得ていつしよに住んでいるのを知り、心から喜んだ。プリンダーヴァンにはヨーゲースワリも連れて行った。



ブリンダーヴァン

この聖地は風光明媚という点からも、またクリシュナとラーダーのあまりにも有名な伝説からも、ヒンドゥー教徒の憧れの地である。ラーマクリシュナは永住したいと思ったほどここが気に入ったが、カーリー寺院に老母を残してきたことでもあり、やっと思いつまったくらいであった。しかし、ヨーゲースワリには、この地に住みつくようと勧めたところ、彼女はもとの弟子の顔を見つめてほほえみながらうなずいた。ラーマクリシュナがこの聖地を離れて間もなく、彼女は亡くなったということである。

一行は約四カ月にわたる巡礼旅行を終えてカルカッタに帰って来た。ラーマクリシュナはブリンダーヴァンから土を少々持って帰り、その一部を五聖樹パンチャパテイの柱に埋め、一部を地表にまいて、「さあ、今日からここはブリンダーヴァンと同じ

だよ」と言つて嬉しそうに笑つた。そして一日、ヴィシユーヌ派の説教師たちを大勢招待して祭をした。マトールは説教師一人に十六ルピーずつ、祭に集まつてきたクリシユナの信者たちに一ルピーずつ布施をした。

このころのことである。ある夜、ラーマクリシユナが五聖樹パンチャパテイの杜の方に歩いて行くので、フリダイは数歩後から蹠ついていった。杜もの近くに來たとき、彼は突然、叔父の体が光になり、その光で杜が明るく輝いているのを見た。おどろいて目をこすり、何度も見直すのだが、同じことである。ふと自分の体に目をむけると、何と、自分自身も光りかがやいているのだ！ある思いが胸をよぎり、彼は感きわまつて氣狂いのように叫び出した――。

「おーっ、ラーマクリシユナ！ おーっ、叔父さーん！ 私らは普通の人間じゃないんですよ！ さあ、さあ、こんなところにグズグズしていないで、世界中の国ぐにをまわつて、人類を救つてやりましょう！」

ラーマクリシユナはあわてて振りむき、

「黙れ、黙れ、大声を出すな！ 虎でも出たかと思つて皆がとんで來るぞ」

と、たしなめたが、甥の耳には入らない。急いで近より、彼の胸に手をあてて、「大実母！ このバカ者の靈眼めをふさいで下さい」と言つた。とたんにフリダイの見ていた神々しい光景は

消え、もとの暗がりに戻ってしまった。凡庸な甥はがっかりして涙ながらに抗議する。叔父はなだめて言いよかせた。

「お前にはまだ早すぎると言っているんだよ、誰だって永久に愚かであるわけではないから、がっかりするな。それくらいのことを、かいま見たからといって大き過ぎるようじゃ仕様がな。わたしは毎日二十四時間、もつともつとすばらしい光景を見ているよ、けれど別に大きな声など出さないだろう?」

長兄ラムクマルの遺児、アクシャイは十七歳のときからカーリー寺院へ来て役僧をつとめていた。生まれるとすぐ母に死なれ、間もなく父親はカルカッタに出てしまったので、赤ん坊のころからずっと祖母のチャンドラマニと叔父のラーマクリシュナに育てられたのである。ラーマクリシュナはどんなにこの甥を可愛がっていたことか。また、心の純粋な、天使のように美しい青年であった。

一八六九年に結婚したが、それから二、三ヵ月後にひどい熱病にかかり、手当ての甲斐もなく、僅か二十一歳で亡くなってしまった。臨終のとき、ラーマクリシュナは前三昧状態になり、甥の魂が肉体から離れる有り様を見ていた。高い意識から観ると、「死」は、より自由な世界への新生にほかならない。甥の魂（この場合は精妙体）は鞘から抜き放たれた剣のように、病み疲れた

肉体を捨ててかがやかしく旅立って行った。ラーマクリシュナは恍然たるなかでその旅立ちを祝福し、喜び笑い、歌い踊った。

ところが翌日になって普通の意識に戻ると、愛する甥を失った悲しさに彼の胸はしぼられるように痛む。そして、「自分でさえ、愛するものと別れたらこの有り様なのだから、死の実相が見えない一般の人たちは、こんな場合どんなに悲しみ苦しむことだろう」と思うのであった。後に彼は信者たちの世俗的なごまごまとした悩みや怖れを実に熱心にきいて、彼らの悲嘆を慰めやわらげるのに懸命に心をくだいた。そんなとき、よく歌をうたって聞かせた。

ハリの名呼んで涙を流す（ハリはヴィシューヌ神の別名）

それはいつの日 いつなれる

ハリの名呼んで欲みな消える

それはいつの日 いつなれる

ハリの名呼んで体が震える

それはいつの日 いつなれる

〔不滅の言葉コクムリトより〕

それから一年あまり経った一八七一年の五月に、マトールがひどい熱病にかかった。一週間

ほどすると口もきけなくなつてしまった。ラーマクリシュナがカーリー寺院に来て以来十五年にわたつて、彼は誠心誠意、ラーマクリシュナの世話をし、保護してきたのである。ラースマニの三女の婿だったので、ラーマクリシュナは「三番目の若旦那」という意味で、マトールのことを「シエジョさん<sup>バブ</sup>」と呼んでいた。シエジョさんは彼のことを「ババ」と呼んでいた。これは出家修行者に対する尊称である。このババが長年、世間から気狂い扱いされていたときも、シエジョさん<sup>バブ</sup>だけはその神聖な素質を片時も疑うことなく、掌中の珠のようにして大切に面倒をみてきたのであった。

マトールに大実母<sup>マ</sup>のお迎えが近づいていることを知ったラーマクリシュナは、毎日カルカッタの邸にフリダイを見舞いに行かせたが、自分では一度も行こうとしなかった。最後の日には、フリダイをも行かせなかった。午後二時ころからずっと前三昧状態になり、五時少し過ぎて意識を戻し、フリダイをよんでこう言った――。

「天からお迎えの馬車がきて、大実母<sup>マ</sup>のお使いたちがやさしく手をかしてシエジョさん<sup>バブ</sup>を乗せてやった。馬車は神さまの国へ向かつて行つたよ」

夜がふけてから寺の職員が部屋に来て、「旦那様は夕方方の五時にお亡くなりになりました」と報告した。



サンブー・マリックの家



サンブー・マリック

マトールの死後、やはりカルカッタに住んでいるサンブー・マリックという富豪がラーマクリシュナのところに足繁く通ってくるようになった。この人はブラーフマ協会サマージの会員だったが、ラーマクリシュナにすっかり傾倒し、「お師匠様グ」と呼んで、マトールが生前していたように心から喜んであらゆる面にわたってラーマクリシュナの世話をした。

「師匠グ」「先生」などと呼ばれることを生涯好まなかったラーマクリシュナが、「グルジなどと呼ばないでおくれ。お前こそわたしのグルだよ」と言って止めても、サンブーは変更しなかった。

「お師匠様グ」に四年間奉仕して、彼はこの世を去る。病中も健康時と同じように朗らかで、死ぬ二日前にフリダイが見舞いに行ったとき、



サーラダマニ・デヴィの母親  
シャーマスンダリー・デヴィ

「私は死ぬのなんか少しも気にしていない。荷物はすっかりまとめて、いつでも出発できるよ」と言つて笑つたという。

一八七二年三月、ラーマクリシュナの妻、サーラダマニは、実父に伴われて夫のもとに来た。彼女が初めて夫に会つたのは結婚式のときであるが、当時は五歳という幼さだったので、事の意味も夫の人となりも皆目わからなかつた。二度目が十三歳のとき、夫がカマールプル村に歸つていたときである。このときも別に自分の身の上について深く考えることはなかつた。し

かし、すでに十八歳の立派な女性に成長すると、将来のことについて心配せずにはいられない。カルカッタから遠く離れた田舎には、さまざまな噂が聞こえてくる。

ラーマクリシュナは一種の狂人である——。  
いや、ラーマクリシュナは千年に一人しか現れないほどの偉大な宗教家である——。

本人からは便り一つ来ない。思いあぐねたサーラダマニは、自分で行つて事実をたしかめ

ようと決心し、両親を説得したのである。

ラーマクリシュナはやさしく親切に妻を迎えた。人の噂による不安はあとかたもなく消え、彼女は姑のチャンドラマニと同じ部屋に住むことになった。父親は安心して、二、三日滞在した後、田舎に帰って行く。

五年前と同じく、ラーマクリシュナは再び若い妻の指導にとりかかった。インドでは、男にせよ女にせよ、出家したものはすべての責任を免れるのであるが、彼は妻としての彼女の権利を認めて、こう申し出た。

「すべての女性は、宇宙の大実母の顕現だ。だからわたしは、すべての女性を母親だと思っている。お前に対しても同じだよ。だがお前がどうしても世間並みの暮らしをしたいと言っているのなら、わたしはお前と結婚式をあげたのだから、お前の言う通りにしよう」

サーラダマニは、まことにこの宗教家の妻にふさわしく、夫を理解し、同感した。そして、自分は夫を世俗の生活に引き下げることが望まない、ただ彼のそばにいて彼と姑の世話をさせてほしい、それから神に仕える方法を教えて頂きたい、と答えたのである。

妻が到着して二、三カ月後、ラーマクリシュナは吉日を選んで特別の儀式をとり行なった。カーリー大実母の御座にサーラダマニを坐らせ、香り高い花々を供え、白檀香をたいて礼拝し、深い三昧に入る。礼拝されるものも自然に恍惚たる半意識状態になり、二人の魂は永遠の世界



サーラダマニ・デヴィ

において結ばれた。これは「女性礼拝シヨラシブライジャ」といって、密教派クントウの儀式の一つである。

このとき、サーラタマニは翌年の十一月まで滞在している。二度目は一八七四年四月に来たが、一年あまりして重い病気になり、療養のため生家へ戻った。それから一八八四年に夫のもとに来てからは、最後までそこを去らず、夫の臨終をみとつたのである。

この、全く肉欲を離れた夫婦関係は、一般の人びとから見れば不可解に思われるかも知れない。しかしインドの宗教家の考えによれば、精神力を發揮するための第一の必要条件は、禁欲である。ラーマクリシュナは、「もし人が十二年間絶対の禁欲を守るならば、超人間的な偉力を獲得する」とも、「もし神を体得しようと思うならば、絶対の禁欲を守らなければならない」とも言っている。

この思想は仏教その他においても同様である。たとえば仏教で戒、定、慧の三学という考えの基調は、生活様式の限定制限（戒）を予備条件として精神統一（定）を完成し、これによって宗教的認識（慧）を得るという意味で、この中、戒の重要項目の一つが禁欲であることは言うまでもない。西洋の精神分析などの考えによれば、禁欲生活は不自然であり、しばしば精神障害の原因になると教えるが、この無理な抑圧という意味の禁欲と、積極的に精神生活の高揚を目指す自由意志的な戒律とは区別して考えるべきであろう。この点においても、欧米を本とした近代的生活態度とインドの宗教人のそれとの間には、一大差別があることを見逃しては

ならない。

『不滅の言葉』の中から彼の話を抜粋してみよう。

「神を覚るためには精液を出さないようにすることだ。十二年間出さないと特別な力が生まれてくる。体内にメダ神経という新しい神経ができて、あらゆることを思い出し、記憶し——また、あらゆることが理解できるようになる。精液を出すと、人間として最も重要な力が弱まるのだ。夢精は害がない。夢精で出したあと残った分で十分役に立つ。女と過す必要はない。聖チャイタニヤがある人に、『あなたは信者たちにこんなに多くの教えを授けておやりになるのに、彼らがさっぱり進歩しないのは何故でしょうか?』ときかれて、こう答えた。

『この連中は女と交わって精力をムダ使いするから進歩しないのだ。だから真理<sup>かみ</sup>を体得することができないのだ。穴のあいた壺に水をいれておくと、みんな流れ出してしまふ』(『不滅の言葉』一八八四年三月二十三日より)

アクシャイの死後、ラーマクリシュナの次兄ラメスワルが代わって寺院の役僧を勤めていた。占星学に詳しく、朗らかな面白い人物だったが、この人も一八七三年に四十七歳で亡くなった。後、彼の息子のラムラルが来て寺の仕事をするようになる。ラーマクリシュナは他人に対して

サーラダマニのことを、「わたしの妻が」とは言わずに、よく、「ラムラルの叔母が……」と言っていた。

一八七六年、母チャンドラマニは八十五歳の高齢で逝去した。